

『北と南』における死の表象と対話の可能性

木村 晶子

序

「ギヤスケル夫人の人物たちには、もう少ししっかり生きてほしいものだ!」と、1850年12月12日にW. H. Willis宛の手紙でディケンズが揶揄したように、初期のギヤスケルの作品では数々の死が描かれている。そう語ったディケンズ自身も、ヒロインの死の反響の大きさが社会現象にまでなった『骨董屋』を始め多くの人物の死を描写したが、ギヤスケルの場合はそもそも処女作『メアリ・バートン』の執筆動機が、自らの幼い息子の病死による鬱状態の克服だった。自身の乳児期に母を亡くし、航海に出た兄も行方不明となり、死産も経験したギヤスケルにとって、喪失体験が創作活動の原点にあったのは想像に難くない。

『メアリ・バートン』では、初期資本主義社会における労働者の悲惨な死と資本家の暗殺を通して、家族の死の悲しみが階級を超えたキリスト教的人間愛へと昇華される過程が示されている。一方、同じくマンチェスター（作中ではミルトン）を舞台にした社会問題小説でありながら、『北と南』では労働者から資本家へと作品の主体が移り、中産階級のヒロインが相次いで身近な人々の死を経験する。実は『北と南』は自らの雑誌に連載を依頼したディケンズがつけた題名で、1854年12月17日付のギヤスケルの手紙には死のテーマの重要性を示すかのように“Death and Variations”という題の作品構想が書かれている。しかし、従来『北と南』は社会問題小説、恋愛小説、教養小説として批評され、死のテーマを中心にした批評は、当時の埋葬改革とヒロインの公的・私的領域の役割に注目したMary Elizabeth Hotzの論考(37-66)が目立つ程度である。

『北と南』は対話への信頼に満ちた作品である。労資問題の解決は、組合運動やストライキのような力の行使ではなく、共感と信頼に基づく労資双方の対話によるべきだというメッセージは明らかだろう。¹ だが労資の対話以外にも、様々な登場人物の間で幾重もの対話の糸が交錯し、主人公マーガレット・ヘイルを取

り巻く世界全体を織物のように包み込んでいる。実はその対話の多くは、登場人物たちの死を契機に生まれたものであり、喪失の悲しみと同時に、濃密な人間関係と生への意志が見出せることに気づく。いうまでもなくクリスチャンにとって死は「永遠の生」の始まりで喪失に留まらないが、『北と南』の注目すべき点は、「永遠の生」という来世の救いのみではなく、現世での新たな対話と生の可能性が描かれる点ではないだろうか。² 本論では、喪失体験を作品の要とするだけでなく、死の表象が対話の可能性を示していると解釈し、ギャスケルの文学のひとつの特色を考えたい。

1 労働者の死

マーガレットの最初の喪失体験は、繊維工場の綿埃を原因とする肺疾患による女工ベシー・ヒギンズの死である。労働災害の悲惨さが浮彫になる点は、『メアリ・バートン』の労働者の死の描写の延長だが、ここではむしろ死者とヒロインとの関係が重要になる。父が牧師職を辞した結果、「南」の田園から「北」の工業都市に移住せざるを得なくなったマーガレットは、「新たな友」となるヒギンズ父娘との出会いによって「人間の興味を見出し」、「ミルトンがより明るい場所になった」(71)³と感じる。しかし最初の会話から、ベシーは「春が来ようが夏が来ようが、私が元気になる見込みはない」、「自分の春の訪れは天国でのこと」と語り、父ヒギンズも「可哀そうに、でもそれがおまえにとっては慰めだ。そんなに先のことではないよ」(71)と死期の近さを口にする。ベシーは初めから〈死にゆく者〉として登場するのである。

Garrett Stewart は英国小説における死の表現をたどる中で『北と南』にも触れ、ベシーをマーガレットの〈ダブル〉ととらえて、彼女の死に直面する経験がマーガレットの自我の発達に不可欠だと指摘する(106)。だが、〈ダブル〉ではなく、他者としてのベシーとヒギンズとの出会いによって、「二つの国民」とも称されるほどの階級格差の現実が明らかにされつつも、それを超えた信頼関係が築かれる点こそ重要ではないだろうか。マーガレットの成長は、ミルトンにおける〈異文化経験〉を通してヒギンズ父娘をはじめとする他者との対話によってもたらされる。ソートンとの恋の成就も、彼女が「商売人」と呼んで軽蔑していた彼への偏見を克服し、異なる背景をもつ他者の人間性を理解し、最も密な関係を達成

したと解釈できる。恋愛は、ヒロインの個人的感情の発露というより、他者との関係のあり方と女性の公的空間への参加の可能性の問いとして描かれている。

当時の中産階級のレイディの慈善的慰問とは異質の、相手を尊重しつつ意見の対立を明らかにする関係は、ベシーの死の必然の悲劇を超えた生のあり方を示唆する。⁴ ストで荒れる父を案じるベシーを慰めようとするマーガレットに対し、ベシーは「あなたはずっと居心地の良い緑豊かな場所で過ごし、貧乏や心配事、不正など知りもしないくせに」(129)と言う。これに怒ったマーガレットは、死期の近い母、無実の罪に問われて海外逃亡中の兄をもつ苦しみを語り、心配事と無縁のはずがないと言い返す。ベシーは謝り、彼女もまたベシーによって「自分の悲しみだけにとらわれていたけれど、あなたが何年も耐えねばならなかったことを聞いて、私も強くなれる」(129)と感じる。こうして、死の影の内にありながらも二人は互いの異なる立場を言語化し、価値観を修正してゆくのである。

ベシーの死はまた、ヒロインにとって初めて遺体を見る経験でもある。姉の死を伝えにヘイル家を訪れたベシーの妹メアリは、崇拝していたマーガレットの持ち物を身にまとっての埋葬を姉が希望していたため、何か分けてほしいと頼み、さらにマーガレットが亡き姉に会ってくれるかを尋ねる。ヘイル夫人の昔からのメイドで家族同然のディクソンは「こういう平民たち」(202)との関りは無用とばかりに断り、マーガレットも遺体は見たことがないと青ざめるが、悲しみに沈むメアリに懇願されて承諾せざるをえない。だが、ヒギンズ家を訪れたマーガレットはベシーの亡骸を前にしてこう感じる。

Then Margaret was glad that she had come. The face, often so weary with pain, so restless with troublous thoughts, had now the faint soft smile of eternal rest upon it. The slow tears gathered into Margaret's eyes, but a deep calm entered into her soul. And that was death! It looked more peaceful than life. All beautiful scriptures came into her mind. 'They rest from their labours.' 'The weary are at rest.' 'He gives His beloved sleep.' (203)

恐れていた〈死体〉は、あらゆる苦しみからの解放を視覚化させて悲しみを軽減するのだった。それはまた、「永遠の安らぎ」をもたらす恩寵の証でもある。

娘の死に目に会えずに帰宅したヒギンズの狂暴な言動にもマーガレットは動じず、亡骸に直面するよう静かに促す。死体を怖がっていた彼女の声に最早「恐怖も疑いもない」(205) ことから、死者によってむしろ力を与えられたというエンパワメントすら読み取れるだろう。

しかし、遺体は対話の絶対的終焉をも明らかにする。労資対立の嵐の中、ストの失敗に絶望し、娘に「少しでも慰めてもらおう」(205) としていたヒギンズは悲嘆にくれる。「最早何も娘を傷つけるものはない」ものの、「初めは辛い仕事、最後は病気で犬畜生のような人生を送った」(205) 彼女が、ことばも、悲しみも届かない世界に旅立ってしまったと彼は泣きながら語るのだった。

一方で、ベシーの死は新たな対話の契機となる。この作品では、死は対話の終焉と同時に始まりを意味すると言えないだろうか。父が酒を飲まないようにしてほしいとベシーが言い遺したため、マーガレットはヒギンズが悲しみを酒で紛らわさないように自宅に連れ帰り、ヒギンズはマーガレットの父ヘイル氏と語り合う。初めは妻が病気なのに「酔っ払いの不信心者」(207) を連れ帰ったことに呆れる父だったが、優しく丁寧にヒギンズに應對し、ヒギンズの「ありったけの潜在的な礼儀正しさを無意識に呼び起こす」(209) のだった。二人の対話は、ヘイル氏が牧師職を辞する冒頭からベシーとマーガレットの来世に関する会話を経て、父とは対照的に宗教的懐疑とは無縁の、兄フレデリックの、スペイン人の恋人のためのカトリック改宗に続く宗教的テーマである。ヒギンズは不条理な現実には神の存在を疑ってきたものの、娘の悲惨な死を前に、ヘイル氏が何と言おうと「この揺れ動く世界にただひとつの確かで静かなものがあり、理屈に合おうが合うまいが、それに自分はしがみつく」(211) と神への信頼を宣言する。父が信仰を否定しているわけではなく、理屈抜きに信じることこそが「このような時代の唯一の慰め」(211) だとマーガレットは語り、「国教徒マーガレット、非国教徒の父、不信心者ヒギンズが揃って」(216) 跪いて祈る場面でこの章が閉じる。

ギャスケルの問いが階級を超えた共感の可能性だとすれば、死者のもたらす悲しみとそれを癒す信仰こそ、その答えだろう。教義の違いを越えたキリスト教信仰そのものの危機とそれゆえの救いの意味の重みに、非国教徒だった彼女は一層敏感ではなかったか。だが、『メアリ・バートン』で死の悲しみが階級を超える共感を喚起する情緒的装置として機能するのは異なり、ここでは死を受け止め

て生きる道にこそ共感の希望がある。愛する者を失う悲しみは、対話による生者の関係の構築への契機となることで、エンパワメントに転じなければならない。作中ではもう一人の労働者、ジョン・バウチャーの死が描かれる。彼はヒギンズの隣人で餓死しそうな子供を何人も抱え、ソーントン邸襲撃に加わって暴徒となる。職を得られないばかりか、組合からもストを失敗に導いた裏切者とされ、資本家と仲間の労働者双方との〈対話〉を奪われた彼は、入水自殺してしまう。他の人物の死が伝聞で間接的に描かれるのと違って、彼の溺死体が蝶番を外したドアに乗せられて運ばれる場面は、川に流れた染料による遺体の変色まで加わって、グロテスクなまでに写実的である。

They put the door down carefully upon the stones, and all might see the poor drowned wretch — his glassy eyes, one half open, staring right upwards to the sky. Owing to the position in which he had been found lying, his face was swollen and discoloured; besides, his skin was stained by the water in the brook which had been used for dyeing purposes. The fore part of his head was bald; but the hair grew thin and long behind, and every separate lock was a conduit for water. Through all these disfigurements, Margaret recognised John Boucher. (269)

バウチャーの死の場面におけるヒロインの言動を通して、彼女の高潔さと強さが明らかになる。ベシーの遺体を見た後では、変死体にすら恐怖ではなく憐れみと敬意を抱くマーガレットは、「気の毒に歪んだ苦しげな顔」(269)に耐えずに死顔をハンカチで覆う。さらに、ショックのあまりバウチャーの妻とは顔を合わせられないと言うヒギンズと、死体を前にして震えが止まらない父を見て、彼女は「私が行くわ」(270)とバウチャーの妻に夫の死を伝える役目を引き受ける。ことばを失う男たちとは対照的に、彼女の対話の力が示されると言えるだろう。ベシーの死後のヒギンズとのやりとりに続き、この場面の言動からは「夢に見ている天使のように明るく強い」(130)という、ベシーの理想化されたマーガレット像が示されるのではないだろうか。

バウチャーの死は、当時の社会問題小説に共通する組合の脅威を強調する一方で、家庭という私的空間と労資問題に揺れる公的空間が交錯する、この作品なら

ではの新たな希望を生み出す。それは、バウチャーの子供たちを養うためプライドを捨てて職探しするヒギンズと、工場主ソーントンとの対話である。ヒギンズはソーントンの工場で何時間も待った末に追い払われるが、結局その誠実さと忍耐が認められソーントンに雇われる。彼がソーントンに率直に意見を述べることによって、やがては労働者の食堂など様々な改革が行われ、バウチャーの悲劇的な死を契機に、労資の個人としての対話による社会改良が実現される。ここでも対話の媒介者となるのは、ヒギンズにソーントンとの交渉を勧めたマーガレットである。

このようにマーガレットは階級間の仲介者となるだけでなく、親子関係やジェンダー規範をも越境するヒロインとして描かれる。ヒギンズ一家との友情によって階級の違いを越えるだけでなく、親子の世代の違いを越えて父母の親代わりとなり、晩餐会では男同士の会話に興味を抱き、母の死に際しては、当時の中産階級の女性には異例だった葬儀への出席を主張する。両親を亡くしてミルトンを去るマーガレットが、ヒギンズに別れの挨拶に行く場面では、不潔さを恐れて労働者の居住区に近づけないショー叔母によって、一層彼女の越境性が強調される。裕福な従妹の令嬢のコンパニオンの役割を余儀なくされたロンドンでの生活とは対照的に、死者の影の中にありながらも、ミルトンは彼女の主体的な行動を可能にする空間となるのだった。

2 保護者の死

女性作家にとって、ヒロインの母の喪失は特別な重みをもつ。⁵ ギヤスケルの『メアリ・パートン』、『ルース』、『魔女ロイス』、『妻たちと娘たち』ではいずれもヒロインが母を亡くしているが、唯一『北と南』において母の喪失に至る過程が表現され、母の差し迫った死が、新たな都市空間でのヒロインの自立の原点となっている。付き添いなしにヒギンズ家を頻繁に訪れるマーガレットの行動が、当時としては非常に珍しいことは、父の死後、彼女がヒギンズに最後の訪問をする際に、ショー叔母が「以前彼女がよく行っていた場所に、許可なしで行くのを許した」(333)という一節からも明らかで、母が健在ならマーガレットの行動も遥かに制限されていただろう。

ここで特徴的なのは、母の病を知ったヒロインの成長が、行動の自由のみなら

ず、対話の力を通して示される点である。冒頭から〈眠れる美女〉のようにうたた寝するイーディスと対照的に、マーガレットは覚醒したヒロインであり、ヘルストンでレノックス氏の求愛を拒絶し、牧師職を捨てミルトンへ移る決意を母に伝えるよう父に頼まれることから、〈語る〉ヒロイン像を印象づける。虚弱な母を労りつつ引っ越しの段取りをし、新生活で母の支えとなる彼女の対話の力はミルトンでさらに強調され、先述したパウチャーの自殺の場面の前にも、父より先に医師から母の病状を聞きだし、母に懇願されて父に相談もせず兄を呼び戻す手紙を書くことでも示される。また、ソーントン邸襲撃の場面では、軍の力で暴徒を抑えようとするソーントンに対して、彼らに親切に「語りかけてほしい」と彼女は繰り返す。いかに利害が相反しても個人として〈語る〉ことが解決への道だという、対話に対する信頼感は、彼女のコミュニケーションにおける中心的役割を強調するように思える。

しかし、暴徒と化した群衆の前でこうした信頼は無力で、彼女はソーントンを庇おうとして額に投石を受けてしまう。この行為によってソーントンが彼女に愛を告白し、彼女自身は否定するとはいえ、彼への想いとセクシュアリティの発露が表現される。作品の山場となるこの場面は、そもそも病む母のウォーターベッドを借りるための彼女の訪問だった。アイルランド労働者雇用によってストに対抗するソーントンへの労働者の怒りの爆発という、ミルトンの産業社会のマクロなレベルの危機と、ヘイル一家の母親の死の危機というミクロなレベルでの緊張関係が並行し、集団的暴力による死と個人の死の脅威が重層的に暗示されている。

この作品では登場人物の死を通して、私的空間と公的空間の相互関係が探求されてゆく。ヘイル夫人がベシーと相前後して死の床に臥すこともまた、家族の死の悲しみの普遍性を示す一方で、若くして重労働の末に病む女工の哀れさを改めて感じさせる。先述したように、ヒギンズ一家との交流とベシーの死によってマーガレットはミルトンの現実を学び、公的空間における対話の可能性を模索するが、母の病と死は、ロールモデルたるべき女性の喪失という形での、旧弊な価値観からの解放を意味する。ミルトンの方言を使うマーガレットにヘイル夫人がショックを受ける場面は、母からの自立と新たなことばの獲得を象徴的に表すだろう。

上流階級の娘としての価値観を捨てられないヘイル夫人は、礼服を新調できないために姪の挙式に出席せず、夫の信仰上の悩みを全く理解せずに出世を望むば

かりであり、新興工業都市ミルトンでは病に倒れてしまう。ミルトンでは唯ひとりソーントン夫人と交際するのも、夫人が身に着けた「先祖伝来の家宝」に見える「本物の古いレース」(91)という階級的指標からの判断だった。死を覚悟したヘイル夫人はソーントン夫人に娘の母代りとなるよう頼むが、息子の恋心、さらに求婚に対するマーガレットの拒絶を知るソーントン夫人はマーガレットに憎しみすら抱いており、結局救いにはならない。過去に囚われた生き方しかできないヘイル夫人には、死の床の願いによってすら、娘とソーントン夫人の間に真の対話を築く力はないのである。

とはいえ、ヘイル夫人の差し迫った死は、この作品のプロット展開の起点として重要である。ソーントン邸襲撃に加え、母の最期に立ち会うために密入国したマーガレットの兄が、その正体を知る男と揉み合いになり、後に駅のホームから転落したその男が死亡する事件も起こる。兄の嫌疑を恐れて、マーガレットは警官の尋問に対して駅にいたことを否定する嘘をつくが、〈語る〉ヒロインとして描かれる彼女が自らの嘘に苦しむのは意味深い。対話への信頼を重視する作品において、虚偽の発言は道徳的罪であると同時に彼女のアイデンティティをも揺るがせ、さらに密かなソーントンへの想いによって一層彼女の苦悩を深める。彼女と兄を目撃したソーントンが恋人との密会と誤解することが、恋の成就の最大の障害となる。母の病と死がヒロインを成長させ、〈語る〉ヒロイン像を形成する一方で、この嘘によって、自らの潔白もソーントンへの想いも〈語れない〉ヒロイン像をも形成するのである。

だが、ヘイル夫人の死は別の人物の間に新たな対話をもたらす。妻に先立たれて悲嘆にくれるヘイル氏は、ソーントンに「マーガレットにすら語れなかった密かな想いを打ち明け」(253)、その苦悩の深さを共有する。ソーントンもまたヘイル氏と同じ闇を経験しながらも「神と結びつく深い信仰」をもっており、二人は「この時だけの会話によって特別な絆で結ばれる」(254)のだった。

ところが、そのヘイル氏もあの世に旅立つ。冒頭の「疲れ果てた心配そうな表情」(21)の寝顔からも彼の健康状態の悪化は予期されるが、夫人の死とは対照的に、彼の死は母校オクスフォード訪問中の突然の悲劇として描かれる。前夜まで談笑していたにもかかわらず、朝には心臓発作で亡くなっていたのである。Terence Wright は、ヘイル氏の信仰の懷疑が作品全体で描かれる不確実な状況を象徴して

いると指摘した上で、ヘイル氏の死こそ、世間との接触を避けていた彼の生涯の究極の形だと述べる（102）。確かに彼は、偽善を拒否して信念を貫く高潔な人物である一方で、現実的問題の処理は娘に任せきりで妻との対話も避け、パウチャーの自殺に動揺するような、社会性と現実感覚の欠けた人物でもある。牧師の妻としての田園生活にすら満足しなかったヘイル夫人は、排煙に包まれたミルトンには全く適応できないが、夫もまた妻の病に自責の念を抱くばかりだった。ミルトンの街をひとりで行き来するマーガレットとは対照的に、夫妻は共に変化に適応できずに閉ざされた精神世界に引きこもり、新たな環境によって命を縮めたとも言える。

では、マーガレットが母に続いて父も失うことは、どんな意味をもつのだろうか。孤児は哀れな弱者である一方で、小説の世界では家父長制から解放された自由な存在としてしばしば力を発揮する。親の庇護のない非力さよりも、人生を自ら切り開かざるをえない自立の必然によって、『トム・ジョーンズ』以来、孤児は、社会における自我の確立を模索する近代小説の主人公にふさわしかった。孤児の主人公の出自が後に明らかになる作品も多いが、『北と南』ではヒロインが孤児となる過程が描かれ、両親の価値観からの解放と喪失を経た上での真の自立の道が探られるのである。

とはいえ、相次いで両親を失ったマーガレットは茫然自失するが、彼女の状況を強調するかのように“Alone! Alone!”と題されたこの章には、興味深いことに彼女の心理描写はない。彼女が語りの視点にすらならず、衰弱した彼女を介抱した後にソートン邸に宿泊する名付け親ベル氏とソートンとの会話が多くの占めている。ベル氏から兄フレデリックの存在を初めて知らされたソートンは、マーガレットと歩いていた男はこの兄ではないかと期待を抱くものの、ベル氏に否定され、ヒギンズとの交流の成果として労働者のための食堂建設の経緯をベル氏に語る。ヘイル氏の死の衝撃が、娘の心理描写ではなく労資関係改善に関する対話へと通じる点には、再度この作品の私的空間と公的空間の交錯を読み取ることができるのではないだろうか。

この後さらに、マーガレットはベル氏も失ってしまう。高齢で美食家の彼の卒中による死にはそれなりの説得力があるとはいえ、彼女は「次々と襲う喪失によって、新たな死が前の死の悲しみにとってかわるのではなく、まだほとんど癒えな

い傷口が開いて再び悲しみが新たになる」(372)と感じる。ただ、ここで悲しみに浸るだけではなく「死によって生がどうあるべきかを新たに教えられた」彼女は、「常に真実にもとづく言動をする強さをもてるよう神に祈り」、「真に英雄的であるためには、意志だけではなく祈りが必要だ」(373)と悟る。ベル氏の死は、世俗的道德を超えて神と対峙する中での真実を彼女に教え、独断的な自我を捨てて生きる道を伝えたと言えるだろう。だが、兄を救うための嘘の意味を最早ソーントンに伝えてもらえないことも、改めて彼女は意識する。死者が遺すのは、永遠の対話の断絶という残酷な現実である。

しかし、ベル氏の死はマーガレットに別の形のエンパワメントをもたらす。彼のミルトンの不動産所有による多額の財産の相続である。『ジェイン・エア』同様、ご都合主義的とはいえども、遺産相続こそ中産階級の女性に唯一可能な経済力の獲得だった。この財産によってマーガレットが破産したソーントンに融資することで、公的領域のビジネスパートナーとなることと私的領域の恋の成就が一致するという理想的な結末がもたらされる。両親と名付け親の死はヒロインを極度に孤独な状況に追いやる一方で、旧来の価値観との決別、新たな自我の認識、ひいては経済力の獲得と公的領域への参加を可能にするのである。

3 時間と他者の認識

「旅人が誰ひとりとして戻って来なかった未知の国」(*Hamlet*, 3幕1場)というハムレットのことば通り、〈死〉の表現は、本来語り得ない時間と空間、ことばの終焉に向き合う行為である。非常に多くの死を扱った『北と南』でも、生者の彼岸への想いすらほとんど言語化されることはない。最も本質的な対話とすら言える、遺された者が絶えず交わすことになる死者との内的対話は見出せず、ヒギンズの慟哭やマーガレットの麻痺状態が描かれるばかりである。ただこの作品では、マーガレットがミルトンを離れる際に持ち帰るベシーのマグカップ、ヒギンズに渡す父の聖書といった形見によって、死はリアルな現在の日常性に取り込まれる。結末でソーントンがマーガレットに見せる、ヘルストーンで摘んだバラの押し花は、彼女の育った場所を見に行かずにいられなかった愛の証として、過去のある時間、ある想いが確かに存在したことを示すに違いない。同じく形見の品は、死者の肉体の不在を示しながらも死者の過去の実在の証となり、〈もの〉を通し

て死者の想いを生者の現実の空間に呼び戻すのである。

過去、現在、未来をどうとらえるかが、死者のもたらす悲しみの克服の鍵となる。『北と南』の重要なテーマが〈変化〉であることはしばしば指摘されている。⁶ 事業に失敗した父の自殺と極貧生活、資本家としての成功、さらには破産というソートンの波乱に満ちた人生からも、新興工業都市ミルトンこそ〈変化〉の空間であることは明らかである。それに加え、変わらないようでありながら変化を免れない農業社会ヘルストン、華やかなロンドンの社交界、伝統を継承するオックスフォード、保養地クローマーの海など、様々な空間と時間のコントラストがここにはある。産業革命を経た劇的社会変化への受容と批判というアンビヴァレントな反応は、ヴィクトリア朝小説の特色だが、ここではさらに喪失体験による変化をどう乗り越えるかという問いが深い意味をもつ。

愛する人の死は人生における最大の〈変化〉であり、時間の流れを残酷に断ち切って過去、現在、未来の意味すら変えてしまう。『嵐が丘』のヒースクリフにとっては、キャサリンの死によって世界の全てが彼女の不在を示す指標と化した。彼女が過去の思い出に変わることはなく、永続する現在の欠落として彼を苦しめ、彼の救いは自らも死ぬことでしかない。だがギヤスケルの世界では、時は遥かに慈愛に満ちており、死者の不在は流れゆく時間の中に吸収される。ヒロインの喪失の苦しみは、空間の変化による時間認識の変化によって、新たな生の受容に向かうのである。

両親亡き後のマーガレットのベル氏との故郷ヘルストン再訪は、そうした認識の変化を示す意味で重要である。かつての自宅の牧師館には新たな家族が暮らし、村の風景も変わり「いたるところが変化している」(357) のを見て彼女は失望し、「改良」ですら懐かしい過去の喪失と感じる。だが「人生のどの時期もめまぐるしく翻弄されてきたことに疲れ切った」(362) と感じながらも、最後に彼女は、自らも含めて変化こそ不可避であり、さらに故郷への愛が変わらないことを悟る。

‘And I too change perpetually—now this, now that—now disappointed and peevish because all is not exactly as I had pictured it, and now suddenly discovering that the reality is far more beautiful than I had imagined it. Oh, Helstone! I shall never love any place like you.’ (363)

モダニズム文学のエピファニーにも近い、この美の「突然の」発見は、自身の絶えざる変化の認識、硬直した主観からの解放によってもたらされる。故郷に対する失望という否定的感情の檻から出ることによって、世界は新たな意味をもつ現実となるのだ。極限まで主観の内にあり続けたヒースクリフにとって、半ば自己と同化したキャサリン以外には他者の存在が意味を持ちえなかったのとは対照的に、ギャスケルの人物は自己の絶えざる変化を認識することで固定化された主観的世界から解放され、生きる意味を見出してゆく。

マーガレットの〈成長〉とはこうした主観の再構築であり、それは感性や価値観が絶えず相対化されるギャスケルの作品空間でこそ可能となる。例えば、職が見つからないヒギンズが南への移住を口にしたときの会話からも、彼女の新たな視点の獲得がわかる。彼女は、ミルトンと違って「仲間づきあいも考えることも話し合うこともない」単調な労働だけの「淀んだ水に浸ったような」(279) 南の日常には耐えられないはずだと彼を諭し、北と南それぞれの幸不幸を客観視する。だが変化と活気に満ちたミルトンも、ベシーにとっては「毎日永遠に同じ光景、同じ音、同じ味、同じ考えしかないことが嫌でたまらない」(128)、まさに同じく「淀んだ水に浸ったような」空間だった。また、牧歌的ヘルストンですら、猫を焼き殺すほどの迷信が残る野蛮な世界でもあった。

主体によって世界は別の様相を帯びるだけでなく、時によって主体もまた変化する。ヘルストンでの「私も絶えず変わる」という認識に続き、ベル氏亡き後、マーガレットはさらに時間認識を深めてゆく。クローマーで長時間浜辺に座って海を眺め、「自分の過去と未来両方について出来事の原因や意味を考え、正しく理解できる」(376) ようになり、「どの程度権威に服従すべきで、どの程度自由であるべきかという女性にとって最も難しい問題」(377) を模索する。絶えず変化しつつ個人の生死を超越した永遠を思わせる海を前に、無常観に近づきつつも、彼女はあくまでも現実を確かなものとして受容し、〈女性の問題〉を考える前提となる社会的存在としての自己を意識できるようになるのだ。

天国か地獄という垂直方向のベクトルをもつキリスト教世界の死の表象が、ロマン派以降は水平方向へと変化し、自己から他者への志向や恋人同士の愛欲という自他の融合の形をとるという Stewart の考察は (101)、まさに『北と南』にもあてはまる。健全な形で死者を悼むには、新たな愛情の対象を見出せるように亡

き人の忘却の反復と〈他者〉の認識が必要だと Elisabeth Bronfen は述べているが (107)、他者の認識は、マーガレットのような省察を経た柔軟な自己認識によってこそ可能ではないだろうか。労働者階級の友ベシー、階級対立の犠牲者パウチャー、母、父、名付け親ベル氏——相次ぐ死者たちは、ヒロインの自己認識を他者へと向かわせる転機となる。過去への拘泥や喪われたものの美化に終わることなく、死者は生者の対話の契機を生み、より豊かな関係性の構築の可能性を遺すのである。

注

- 1 『メアリ・バートン』での資本家の息子の殺害や『北と南』のストのもたらす悲劇からも労働組合批判が読み取れるが、同じく当時の労資関係を扱ったディズレイリの『シビル』にも組合の暴力性への否定的見解が見出せる。
- 2 Michael Wheeler はギヤスケルが最後の審判も地獄も信じないユニテリアン派だったため、『メアリ・バートン』では死後の罰ではなく現世の赦しが強調されていると述べている (200-01)。
- 3 本文中の引用は全て *North and South, The Works of Elizabeth Gaskell, Vol.7* (London: Pickering & Chatto, 2005) により、括弧内に頁数を記す。
- 4 当時の慈善的慰問の視点からの作品論としては、Dorice Williams Elliott の論文がある。
- 5 ヴィクトリア朝小説における母の喪失の意味については Carolyn Dever の著作に詳しいが、ギヤスケルの小説に関しては、わずかな言及のみである (6,31)。
- 6 そのような批評の代表的なものとして Rosemary Bodenheimer の論考がある。

引用文献

Bodenheimer, Rosemarie. "North and South: A Permanent State of Change." *Victorian Fiction* 34.3 (Dec. 1979): 281-301.

Bronfen, Elisabeth. "Risky Resemblances: On Repetition, Mourning, and Representation." *Death and Representation*. Ed. Sarah Webster Goodwin and Elisabeth Bronfen. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1993.

Dever, Carolyn. *Death and the Mother from Dickens to Freud: Victorian Fiction and the*

- Anxiety of Origins*. Cambridge Eng.: Cambridge UP, 1998.
- Dickens, Charles. *The Letters of Charles Dickens*. Vol.6. Ed. Madeline House & Graham Storey. Oxford: Clarendon, 1965-2002.
- Elliott, Dorice Williams. "The Female Visitor and the Marriage of Classes in Gaskell's *North and South*." *Nineteenth-Century Literature*. 49.1.(1994): U of California P.
- Gaskell, Elizabeth. *North and South, The Works of Elizabeth Gaskell*. Vol.7. Ed. Elisabeth Jay. London: Pickering & Chatto, 2005.
- Hotz, Mary Elizabeth. *Literary Remains: Representations of Death and Burial in Victorian England*. Albany: State U of New York P, 2009.
- Stewart, Garrett. *Death Sentences: Styles of Dying in British Fiction*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1984.
- Wheeler, Michael. *Death and the Future Life in Victorian Literature and Theology*. Cambridge Eng.: Cambridge UP, 1990.
- Wright, Terence. *Elizabeth Gaskell: "We Are Not Angels": Realism, Gender, Values*. Basingstoke: Macmillan, 1995.

(早稲田大学教授)

Abstract

Death and Dialog in *North and South*

Akiko KIMURA

As Gaskell's seemingly original title '*Death and Variations*' suggests, *North and South* is a novel filled with death scenes. The heroine, Margaret Hale, experiences a succession of the death of her beloved people. By interpreting the novel as the one whose central theme is how we can overcome the sorrow and despair of loss rather than exploring love or the class system, we realize the significance of dialogue in Gaskell's works.

The tragic death of the two working-class people, Bessy Higgins and John Boucher, shows that Margaret acquires a new perspective of life and freedom to act in the new industrial city despite the shock and sorrow. Her mother's imminent death makes her the mediator between classes regardless of gender restrictions. It is notable that death scenes develop into dialogue such as Higgins's talk with Mr. Hale after Bessy's death, Higgins and Thornton's growing comradeship after Boucher's suicide, and Mr. Hale and Thornton's religious conversation after Mrs. Hale's death. The interactive relationship between public sphere and private sphere is also shown through the death scenes.

The successive death of parents devastates her but liberates her from her mother's aristocratic value system and the paternalistic order. Her godfather's death makes her an heiress, another form of the necessary empowerment which ends in her investment in Thornton's business and their happy marriage. Though representation of death is an attempt to describe the indescribable, this novel explores the possibility of accepting the cruel change and facing life with the enlightened sense of time. Unlike *Mary Barton*, this novel describes deaths not as the unifying experience beyond the class barrier but as that of promoting our self-awareness and establishing dialogue with others through the heroine's process of mourning.

